



立神峡だより

新年あけましておめでとうございます

皆さま輝かしい新年をお迎えのことと思います。ここ立神峡においても、昨年は素晴らしい業績を上げることが出来ました。スタッフ一同決意を新たに、今年は昨年以上の業績向上を目指します。

本来ならば、年末年始は休業するところですが、昨年に引き続き「新年を立神峡で迎えたい」という人が増加し幸先のいいスタートを切ることができました。

昨年は、水難事故も3年連続無事故を継続することができ、本年もこれをさらに継続することを目指して頑張る所存です。

町民の皆さまにおかれましては、引き続き本年も数多くのご利用をスタッフ一同お待ち申し上げます。

里山フェスタで里山の味覚を満喫

毎年恒例となった里山フェスタを11月26日に開催しました。今年は、開催日を八代妙見祭と重ならないように調整したところ、あいにくの雨にも関わらず多くの人たちに来園いただきました。特に、『里山の恵みを喰らう』と題して準備をした鹿肉カレーや猪鍋、川ガニなどの里山ならではのご馳走は大盛況で、皆さん美味しそうに食されていました。各種の体験では、親子で楽しめる巣箱づくりや竹灯籠・シイタケの駒打ち体験などのほかに、今回初めて実施した自然観察会でも多くの人たちが参加し立神峡の自然の素晴らしさを堪能されていました。

里山フェスタと併せて平成29年度八代地域植樹活動も開催しました。緑化関係の表彰や緑の少年団の誓いの言葉に引き続き、記念植樹でツツジやモミジなどの植樹を八代ナザレ園緑の少年団や藤本一臣町長も参加して植えられました。



▲親子で楽しく体験コーナー



▲植樹活動にはたくさんの少年団も参加しました

立神峡に猿が現れる



▲サルも来園。散歩の際はご用心

12月の初め、龍神橋を見ると野生のニホンザルがひょっこりと姿を現し、手すりに座りこちらを見ていたので、直ぐにカメラを構え写真を撮りました。しばらく、こちらの様子を見た後、龍神橋を渡り、姿を消しました。以前、火の国橋の所で、お尻の赤い猿を見かけて以来の出来事でした。

今年は、折しも成年です。犬猿の仲と言いますが、散歩をする皆さまの飼い犬と猿が鉢合わせをしないことを祈るばかりです。

【お問い合わせ先】立神峡公園管理棟
☎ 62-1543 FAX62-1546 (8:30~17:30 火曜定休日)

ホームページアドレス
<http://tategami-camp.com>

市民文化

短歌

孫からの進物なれば何であれ
うれし涙の大吟醸なり
北野津 宮本 末秋

柿の木は裸と成りて三枚の
紅き葉だけが残されてある
吉 本 高橋 澄子

子も孫もみんな集まる鍋料理
話は尽きず類は赤赤
西野津 古崎スエノ

新年の家族で集る香の前
ひぎを揃えて俵せなる也
南鹿野 尾崎 京子

朝刊の郵便受けに入る音
三時半なり仕事とは言え
吉 本 橋村 正之

五十年中学校卒後の同窓会
阿蘇路のバスに師は我のみぞ
西上宮 村内 一誠

湯上りのゆずの色の温もりて
年の夜の眠る入るぬ
西野津 古崎 栄子

去年今年時空の流れはいかにせむ
わが運勢は中吉で佳し
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

白サギの眼光鋭く餌を探す
生き抜く事を示すがごとし
上鹿島 前村 俊子

俳句

木守や熟柿が一つ天辺に
北野津 宮本 末秋

干し柿の日に映え並ぶ村を行く
吉 本 高橋 澄子

小春日に光る阿蘇野やバスの旅
西上宮 村内 一誠

大根のほど良く煮えてみそ自慢
西野津 古崎スエノ

一年の感謝祈りて大晦日
南鹿野 尾崎 京子

カレンダーの一枚揺れる年歩む
西野津 古崎 栄子

まつ青に靖れわたる冬雪陽ざし
町 香山菊童子

老いの坂杖にすがりて恵方道
桜ヶ丘 宮崎敬四郎

老い重ね丘にさゆらぐ枯尾花
桜ヶ丘 吉田 照子

歳末や多忙一途のひと呼吸
町 田中 澄子

八十路来て駆け足で来る年の暮
桜ヶ丘 宮崎トシ子

初日の出心に夢に灯がともり
上鹿島 前村 俊子

風の歌を聴け

比較文学論もどき

法道寺 本田 花風

ノーベル賞発表が近くなり、久しぶりに分厚い文学書を開くと「第三の新人」の後の作家として「村上春樹」を取り上げていた。(昭和が終わろうとしている時、小学館「昭和文学全集」は谷崎潤一郎から村上龍までが入って、春樹は入っていないかった) あらかた目を通し「村上春樹」インターネットで検索、ルーペがなければ読めないほどの小さな文字の資料を取り出した。そこで取り上げていた春樹の「風の歌を聴け」についてデビュー作とあり、三十歳、遅咲きの作品であった。十年の歳月をどう過ごしていたかは納得、大学七年、在学中にジャズ喫茶を開店、それで三十歳の遅咲きを納得。

早速「風の歌を聴け」文庫版を手に入れると一五〇ページの中編。ページが進まない、繰り返し読むが進まない。書評を見ると、平易で親しみやすいが、ストーリーはしばしば難解だ。のっけに登場するハートフィードは歴史上の人物かと思いきや、ネットで検索すると架空の作家であったり、

「鼠」という男がお出ましになるので、擬人法かと思いきや彼は「俺」のことを鼠と呼んでくれ。」と言う友人。随分昔にそう呼ばれたと説明する。会話もストーリーも得も知れぬ感覚になる。タイトルの「ルーマン・カポレーティの短編の二節」何も言うまい、ただ風にだけ心を向けよう」から借りてつけそう。この作品をきっかけにジャズ喫茶を友人に譲り小説家業に専念することになったそう。

作品は「群像」新人文学賞に応募した時、編集部を担当は原稿を読み全く新しい感性をもった大型新人が現れたと直感した。原稿はその妻から娘に渡り、娘は「パパ、村上春樹の小説おもしろかったわ」と言ったそう。娘が感心した作品が分からないでは済まないことになってしまふ。

文庫本の帯には「一九七〇年夏、あの日の風は、ものうく、ほろ苦く通りすぎていった。僕たちの夢は、もう戻りはしない……。」夢ってなんだろう！

次元が違うと次々と展開するストーリーは軽快に耳を強振するし、人間を消化し、言葉や表現、感覚も半端ではないが、自分が春樹と同じような人生を送っていたら、エッセイは自己を表現するが、小説もフィクションに己を反映しているのは、文豪といわれる作家の赤裸々な人生物語のように体験が豊富であれば書いていたのではと、春樹の感覚が少しは分かる。書き始めると後についてくるのが文筆であるのは体験している。ぼんやりしていた青年期がいて嬉しい。

次回へつづく

投稿いただきます作品は、短歌・俳句それぞれ一句とします。必要なのは、ルビを付けてください。また、確認のためお電話することもありますので、連絡先の記入をお願いいたします。